

127. 現地復興における集落内仮設災害対応拠点の利用実態に関する研究

- ジャワ島中部地震被災地 Canden 村の POSKO を事例に -

A Study on Actual Usage of Temporary Stronghold in Devastated Site Recovery

- Case Study of POSKO in Canden Village, Central Java Earthquake Affected Area, Indonesia-

本塚 智貴*・神吉 紀世子*
Tomoki Motozuka* and Kiyoko Kanki*

In reconstruction from the Central Java Earthquake of 2006, Gotong-royong mutual assistance based on the local community, has achieved rebuilding houses in about one year. In doing so, the victims were actively working for reconstruction right after the disaster. This paper aims to reveal how the victims in a village coped with the disaster immediately after the earthquake, especially focusing on the POSKO, a temporary stronghold of the coping activities in the village. Field survey was done in Canden, a village in the area with the severest damage from the Java Central Earthquake. This study clarified by the interview investigation for the local community leaders and use analysis of the photograph of POSKO.

Keywords: Temporary Stronghold, Central Java Earthquake, Victims, Village, Devastated Site Recovery
仮設災害対応拠点, ジャワ島中部地震, 被災者, 集落, 現地復興

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

2006年5月27日に発生したインドネシア・ジャワ島中部地震¹⁾の復興では、被災者は被災後も居住していた集落に留まり、公的な支援を受けて、Gotong-royong と呼ばれる相互扶助の精神を活かした取り組みによって、被害を受けた住宅の約8割が1年間で再建および修復された¹²⁾。

集落が壊滅的な被害を受け、住む場所を失った状態で、どのように被災地に留まり、支援を受け、生活を継続することが出来たのだろうか。

新潟県中越地震被災地の旧山古志村では、震災によって集落が孤立状態になったが、近隣住民の助け合いによって自給自足に近い状態で1日を超えたことが知られている³⁾。しかし、震災翌日以降は被災地外へと避難し、被災地から離れた場所で生活を送りつつ現地復興が行われた。

中越地震の事例のように、我が国においては、基本的には被災地から避難するケースが多く、ジャワ島の事例のように被災後も現地に留まり続けるケースは少なく、国内のケースのみでは被災した状況下において現地に留まる際にどのような問題があるのかといった疑問が解けない。

そこで本研究では、インドネシアにおいて災害後に設置される POSKO と呼ばれる仮設災害対応拠点に着目し、ジャワ島中部地震後、地域が混乱した状態であるにもかかわらず、現地に留まり現地復興が行われた際に POSKO がどのように利用されたのかについて実態として明らかにすることを目的とする。

尚、本研究における仮設災害対応拠点とは「自然災害によって地域が被害を受けた時に、被災者が現地復興をする中で発生する諸問題に対応するために設置する仮設的な拠点」とする。

1-2. 研究の位置付けと研究方法

ジャワ島中部地震に関する既往研究としては、GIS データベースを作成し、災害後の農村集落の復興過程の傾向分析を行った山崎らの研究⁴⁾や住宅復興事業の安全性向上の可能性を検討した檜府らによる研究⁵⁾がある。しかし、これらの研究では被災から住宅の再建に至るまでの被災地での被災者自身の復興にむけた活動に関しては十分には明らかにされていない。

POSKO に関する研究は少なく、2004年スマトラ島沖地震後のアチェを対象とし、支援活動の展開における POSKO の役割について、外部社会と被災者社会をつなぐ役割をはたしていたことを指摘した山本の研究⁶⁾や、ジャワ島中部地震の際に POSKO が、集落における緊急時の共同空間の1つとして設置され、震災後も用途は変更されたが、新たな共同空間として利用されていることを指摘した山口らの研究⁷⁾があるのみである。アチェとジャワ島中部地震の被災地では、被害も社会的背景も異なった事例ではあるが、インドネシアの被災地において災害後対応の場として POSKO が設置され一定の役割を果たしていたことが分かる。しかし、被災地の状況は日々変化しており、POSKO が果たした役割を論じる上では、設置から閉鎖にいたる時間経過の中で、自主的に運営される POSKO がどのように対応できていたのかについて把握する必要があると考えられる。

日本国内における仮設災害対応拠点に類する研究としては、コミュニティによる避難所運営を取り上げた紅谷らの研究⁸⁾や坪川らの研究⁹⁾がある。日本における避難所の多くは、あらかじめ指定されている既存の施設において運営されるものであるため、インドネシアにおいて、被災直後に自主的に立ち上げられる POSKO が、実際にはどのように被災者の生活を支えることが出来ていたのかを明らかにす

*正会員 京都大学大学院工学研究科 (Kyoto University)

ることは、日本国内の事例からでは得がたい知見を与えてくれると考えられる。

本研究の調査方法としては、短期間、仮設として自主的に設置される POSKO の設置から閉鎖までの利用実態と POSKO 間の関係性について明らかにすることとし、村内に設置されたすべての POSKO に関して、Canden 村役場の担当者および実際に POSKO の運営に関わった人物⁽²⁾に対する聞き取り調査を行った。さらに、Canden 村内において、特に住宅の再建がスムーズに行われた特徴的な事例である Ngibikan 集落 RT5 を含む Ngibikan 集落において、実際に POSKO を利用していた地域組織の代表者と住民への聞き取り調査および当時撮影された写真データを参照しつつ、より詳細な POSKO の利用実態について明らかにする。

現地調査は、2009 年 2 月～2011 年 3 月にかけて計 4 回、Canden 村の Ngibikan 集落を中心に継続的に実施した。

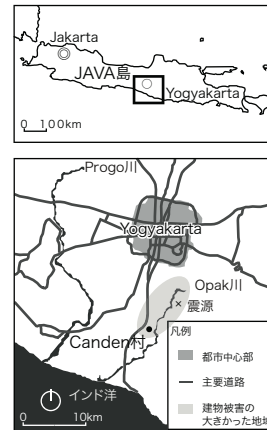


図-1 ジャワ島中部地震の震源と調査対象地の位置

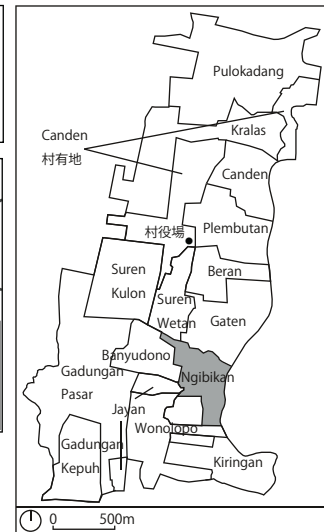


図-2 Canden 村と各集落の位置関係

2. Canden 村におけるジャワ島中部地震の被害

2-1 Canden 村の概要

調査対象地である Canden 村⁽³⁾はジャワ島中部の Yogyakarta 市の南約 10km に位置しており、面積は約 5.4 km²である。Canden 村の位置する Bantul 県はジャワ島中部地震でもっとも被害の大きかった地域でもある(図-1)。

Canden 村は 15 の集落(Pedukuhan)で構成されており(図-2)、1つの集落は 4-6 の RT⁽⁴⁾で構成されている。Canden 村の人口は 11407 人、世帯数は 3245 世帯である。村の東側には Opak 川が流れており、水田の中に居住地⁽⁵⁾が島状に広がっており、居住地内は日陰も多く比較的涼しく快適な環境となっている。主な産業は農業で、集落周辺の水田において多期作による稲作が行われている。また、Yogyakarta 市街地まで通って仕事をしている村人もいる。

2-2 Canden村の住宅被害と住宅の再建

表-1 は震災後の 2006 年 7 月 17 日に作成された行政資料をもとにジャワ島中部地震における Canden 村の住宅被害についてあらわしたものである。ジャワ島中部地震による建物の被害レベルは行政資料の区分では倒壊、大破、中破、軽微の 4 段階で表されている。Canden 村の平均倒壊率は 96.3%となっている。住宅の再建は、震災直後から自力による仮設住宅の建設が始まり、2006 年 10 月からは POKMAS とよばれるグループ毎に、インドネシア政府による住宅再建支援金が給付され、共同作業による恒久住宅の再建が始まった。政府からの支援以外にも NGO や民間企業による支援が行われ、Ngibikan 集落 RT5 と Banyudono 集落の一部では、新聞社から支援を受け、政府からの支援が始まる前に独自の形式をもった 65 戸の恒久住宅の再建が完了した。

3. 集落内仮設災害対応拠点 POSKO の設置と利用実態

本章では、調査シートを用いて村役場の担当者および実際の POSKO 運営者に対して行った聞き取り調査⁽⁶⁾で得られたデータをもとに Canden 村と 15 集落における POSKO の利用実態について明らかにする。

表-1 Canden 村の人口・世帯数と住宅被害

集落名	RT数	人口	世帯数	倒壊	大破	中破	軽微	倒壊率
Gadungan Kepuh	4	629	160	155	5	0	0	96.9%
Gadungan Pasar	4	473	124	114	7	3	0	91.9%
Jayan	6	534	165	161	2	0	2	97.6%
Wonolopo	4	500	151	130	15	2	4	86.1%
Kiringan	5	839	212	198	13	0	0	93.4%
Ngibikan	6	1009	297	290	7	0	0	97.6%
Banyudono	6	771	236	225	8	0	1	95.3%
Suren Kulon	4	605	166	163	3	0	0	98.2%
Suren Wetan	5	773	227	224	0	0	3	98.7%
Gaten	4	487	142	139	0	1	2	97.9%
Beran	6	696	199	188	1	0	2	94.5%
Plumbutan	5	839	232	229	0	0	2	98.7%
Canden	6	1346	402	400	1	0	1	99.5%
Kralas	6	880	267	250	17	0	0	93.6%
Pulokadang	5	1026	265	260	2	3	0	98.1%
Desa Canden	76	11407	3245	3126	81	9	17	96.3%

3-1. POSKO

インドネシア語圏の人によると、POSKO はインドネシア語の Pos と Komando の合成語とされており、直訳するとベースキャンプを意味し、何らかの



写真-1 ジャワ島中部地震後に設置された POSKO
(2006.5.28 Eko 氏撮影)

出来事に対応するために設置されるものである。筆者の知る限りでは、書籍や NGO 等の HP 上において、避難所、支援本部、情報センター、連絡詰所、民間の相談所、簡易医療サービス拠点、災害対策連絡所、住民組織の拠点、地元緊急対応所、ボランティア団体、自警団等と呼ばれている。形態も事務所を構えるものから机があるだけのものまで様々である。写真-1 はジャワ島中部地震の後に設置された POSKO の例である。竹、トタン、ドラム缶等を利用してつくられたバラックのわきに POSKO と書かれた看板が見える。

3-2. Canden 村における POSKO の利用実態

本節では、POSKO が仮設的に設置される際にどのような場所が選ばれ(設置場所)、どのようなものを設置し(構成要素)、それがどのような構造をしていて(構造/形態)、どのように運営され(運営)、どのように利用されたのか(利用)を POSKO の利用実態とし、POSKO の設置から閉鎖までの利用実態を明らかにする。

(1) POSKO の設置場所

図-3 は、Canden 村に設置された POSKO の位置をあらわしたものである。Canden村では村レベルで1ヶ所、15 集落では 63 ヶ所の計 64 ヶ所の POSKO が設置された。POSKO には POSKO Utama と呼ばれる地域の POSKO を統括する POSKO と RT レベルの POSKO があった。設置場所は、比較的環境条件のよい居住地内で、道路に近い場所が選ばれていること、集落内でも分散して設置されていることが分かる。設置場所は運営者の判断によって決められ、倒壊を免れた住宅があった Gadungan Kepuh 集落や Beran 集落の POSKO Utama は個人の住宅が POSKO として利用されたが、利用できる建物のなかった集落では、POSKO を設置するのに十分な広さがあり、外部から支援を受け集落内への支援の分配がしやすい場所が選ばれ、広場や個人の庭が設置場所となった。POSKO は必ずしも集落内に設置されるわけではなく、Jayan 集落や Wonolopo 集落、Pulokadang 集落では、居住地内ではなく、外部からの支援を受け取りやすい場所とし

て幹線道路沿いに POSKO を設置した。

(2) POSKO の構成要素

運営者への聞き取り調査では POSKO は避難の場として主に認識されていることが分かった。しかし、避難の場である以外に、地域を巡回してくる医療関係者による診察の場、共同の炊事場、支援物資の受け取りおよび配給の場、情報集約の場、会議の場の6つの用途が POSKO の用途として挙げられ、これはすべての集落において共通であった。

(3) POSKO の構造/形態

POSKO の構造/形態として写真-1 にあったような廃材を利用したバラックは一時的なもので、最終的にはテントを利用していた。個人住宅に POSKO を設置した集落においても、倒壊を免れた住宅だけでなくテントを併用していた。テントは集落内の個人が所持していたものを利用した地域と NGO や政府から支援を受けたテントを利用した集落があり、テントの一部はアチエで利用されていたものが再利用されており、こうしたテントは POSKO 閉鎖後に支援者に返却されていた。POSKO の規模は 100 数十人から約 450 人までと様々であったが、どの POSKO においてもプライバシーへの配慮は特になく、日本の避難所にみられることのある間仕切りはなく、テント内では男女が共に生活していた。炊事の場合は、POSKO の近くに仮設のかまどが設けられていたが、その他の用途については用途別に POSKO があるわけではなく、1つの POSKO が複数の用途を担っていた。

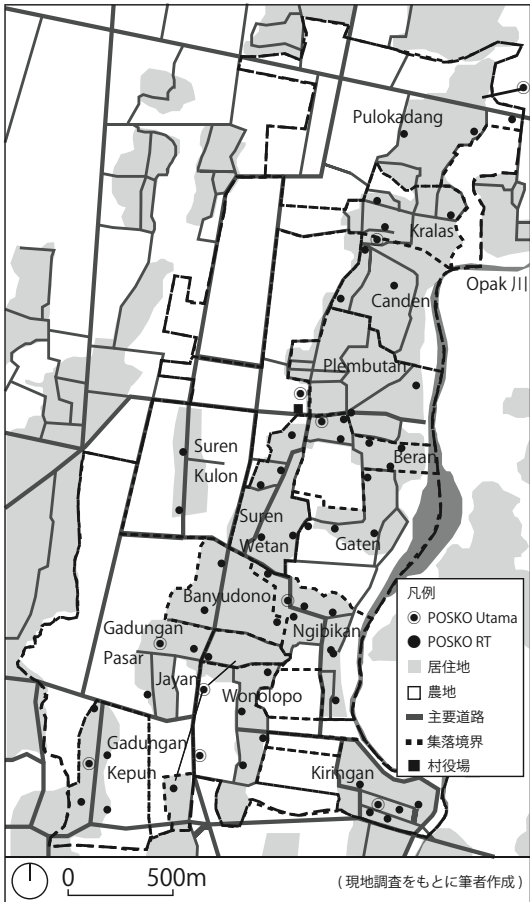


図-3 Canden村内の POSKO 分布

	ドック		R T 数	POSKO の設置数		運営 者数	運営者	運営形態 *1
	年齢	性別		Ut	RT			
Gadungan Kepuh	43 歳	男性	4	1	4	5 人	ドック、RT 長 (4 人)	
Gadungan Pasar	39 歳	男性	4	1	2	5 人	ドック、RT 長 (4 人)	
Jayan	51 歳	男性	6	1	2	7 人	ドック、RT 長 (6 人)	
Wonolopo	37 歳	男性	4	1	4	5 人	ドック、RT 長 (4 人)	
Kiringan	50 歳	女性	5	1	5	6 人	ドック夫、RT 長 (5 人)	
Ngibikan	41 歳	男性	6	1	7	7 人	ドック、RT 長 (6 人)	
Banyudono	51 歳	男性	6	0	3	7 人	ドック、RT 長 (6 人)	
Suren Kulon	47 歳	男性	4	0	2	5 人	ドック、RT 長 (4 人)	
Suren Wetan	34 歳	男性	5	0	5	6 人	ドック、RT 長 (5 人)	
Gatem	44 歳	男性	4	0	4	5 人	ドック、RT 長 (4 人)	
Beran	43 歳	男性	6	1	5	7 人	ドック、RT 長 (6 人)	
Plambutan	43 歳	男性	5	0	2	6 人	ドック、RT 長 (5 人)	
Canden	57 歳	女性	6	1	3	6 人	RT 長 (6 人)	
Kralas	52 歳	男性	6	0	3	7 人	ドック、RT 長 (7 人)	
Pulokadang	54 歳	男性	5	1	3	6 人	ドック、RT 長 (6 人)	

凡例
□: POSKO,U: POSKO Utama, R: POSKO RT,
○: 運営者, ド: ドック, 夫: ドック夫, 長: RT 長, →: 運営, (): 集落の範囲
*1 白抜きのは聞き取り調査を行った人物

図-4 POSKO の運営形態

(4) POSKO の運営

図-4はPOSKOの運営者と運営形態についてあらわしたものである。POSKOの運営は、震災前から集落運営を担っているドックが代表となり、RT長がそれを支える形で行われた。しかし、緊急時にはリーダーシップが必要であり、女性より男性が相応しいとの考えが地域にはあり、女性がドックの2集落では、ドックの代わりにドックの夫やRT長が代表となった。POSKO Utamaのある集落では、ドックがPOSKO UtamaとPOSKO RTを統括し、POSKO RTは1人～3人のRT長を中心に運営が行われた。POSKO Utamaがない集落では、それぞれのPOSKOにCanden村のPOSKO Utamaから支援物資が直接届けられていた。POSKOは基本的に集落単位で運営され、集落内のPOSKO UtamaとPOSKO RTは情報交換も行われていたが、集落を越えた交流はあまり行われていなかった。

また、運営者によってPOSKO内でのルールを定めているPOSKOが殆どであり、Canden集落とSuren Kulon集落を除く13集落では、個人的に支援物資を受け取った場合は、1度POSKOに支援物資を入れ、POSKOから各世帯に配分するというルールがあった。13集落のうち8集落においては個人的な支援や路上における支援の呼びかけも禁じていた。

(5) POSKO の利用

POSKOの設置時期は殆どの集落において地震発生から5日以内に設置されており最も遅かったPulokadang集落でも震災から10日後に設置されている。設置時期と各集落へ届いた最初の支援の前後関係を比較すると、ほとんどの集落においてPOSKOがなくとも何らかの支援は届いていたことがわかる。

利用期間は、各集落およびPOSKOの持つ用途によって異なっており、すべての用途が一度に終わるところと、段階的に終わるところがある。多くの集落では避難の場、診療の場、共同炊事場としては震災後3ヶ月で利用が終わっている。また、POSKOで生活を行いつつも、各被災者によって自宅の瓦礫の除去、仮設住宅の建設が行われ、支援物資の受け取り・配給の場、情報集約の場としては多くのPOSKOにおいて引き続き利用が続けられ、震災後1年ですべてのPOSKOが閉鎖され

	R T 数	POSKO の設置数		人口	人口/ POSKO	設置						最初の 支援 到着日	構造 形態 *2	POSKOの用途別利用期間 *5											
		Ut	RT			主体	時期	場所 *1	敷地選定 理由 *1					利用期間（ヶ月）											
									アクセ ス	広さ	建物														
															1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Gadungan Kepuh	4	1	4	629	157	被災者	7日後	個人住宅				●	5日後	テント (LSM)	Sh H K Su I M										

凡例) ----- : POKMASによる住宅再建支援開始時期, - - - - : 運営者が非常時ではなくなったと判断した時期
*1 各地域においてメインのPOSKOとして利用されたものに関して
*2 LSM: Lembaga Swadaya Masyarakat (NGO), PLN: 電気会社(国内), TNI: インドネシア軍, GOV: インドネシア政府
*3 Sh: 避難の場, H: 診療の場, K: 共同炊事場, Su: 支援物資の受け取りおよび配給場所, I: 情報集約の場, M: 会議の場
*4 聞き取り調査では閉鎖時期に関する具体的な時期については回答を得ることが出来なかった
*5 期間に関しては、数日のずれはあるものの同じ集落内では同じタイミングで閉鎖されていた

図-5 POSKOの設置と用途別の利用期間 (聞き取り調査をもとに筆者作成)

ていた。利用期間は、個人の住宅やマーケットに設置されたものは他の POSKO と比較すると利用期間が長くなっている。運営者は、主に仮設住宅の完成(1~3ヶ月後)、恒久住宅の建築開始(4ヶ月後)、恒久住宅の完成(1年後)をもとに非常時ではなくなったと判断しており、POSKO の閉鎖時期と比較すると、判断後、すぐに POSKO が閉鎖される集落と判断後も引き続き利用が続けられている集落がある。

3-3. POSKO の利用実態

POSKO は必ずしも集落内に設置されるものではなく、震災当日から被災後およそ3日という短期間で運営者が状況を判断し設置するもので、主にテントが利用されていた。

支援と設置時期の関係を見ると、POSKO がなくとも支援は届いており支援を受けるために POSKO が必要であったというわけではないが、運営上のルールがあることで、個人が受けた支援物資を再配分することで、地域内での支援格差を防ぐ役割が POSKO にはあったと考えられる。

こうした POSKO には、避難の場としてだけでなく、診療の場・共同炊事場・支援物資の受け取りおよび配給場所・情報集約の場・会議の場といった用途があり、平時からの RT が基盤となった集落単位で運営され、閉鎖の際には仮設・恒久住宅の完成が1つの目安となっており、POSKO は主に震災によって消失した居住機能を代替していたと考えられる。住宅完成後すぐに閉鎖される POSKO もあれば、完成後も数ヶ月は利用が続けられる POSKO もあり、運営者の判断が POSKO の閉鎖時期の違いに現れていると考えられる。

4. Ngibikan 集落 RT5 における POSKO の利用実態

3章では POSKO には6つの用途があることが把握されたが、6つの用途が1つの POSKO の中でどのように実現されていたのかに関しては聞き取り調査からは明らかにすることが出来なかった。そこで、本章では実際の利用者に対する聞き取り調査および写真を参照し、より詳細な POSKO の設置および、短期間で住宅再建の中でどのように POSKO の利用が行われていたのかについて明らかにする。

4-1. Ngibikan 集落 RT5 の概要

Ngibikan 集落 RT5(以下 RT5)は人口約240人(52世帯)で、地域組織としては RT、婦人会、青年団、女子青年団が集落および RT5 レベルで活動していた。すべての住民による共同作業によって政府による公的な住宅再建施策が決まる前に独自の形式をもった65戸の恒久住宅の再建が終了し、再建に関わった建築家の Eko Prawoto氏によって再建過程が記録されていた。

4-2. RT5 における POSKO RT の配置と利用実態

図-6 は、RT5 における POSKO の設置場所と震災前の建物の位置を

示したものである。RT5 では POSKO RT の他に2つのテントが RT 内に設置されていたことが分かる。

図-7 は POSKO RT の配置図である。POSKO RT は、個人住宅の前庭で、車の通ることができる道路に近い位置に設置されている。POSKO には、テントをそのまま利用するのではなく、レンガ、木材、竹材も利用されており、POSKO RT の床面は地面より50cm程高い位置に作られていた。共同炊事施設は、テントの向かい側の井戸の隣に設置され、かまどの上には雨よけのトタン屋根が見られる。テントは、主に避難の場、診療の場、支援物資の受け取り・配給の場として利用され、震災前からあった夜警小屋が情報収集の場、会議の場として利用されていた。

4-3. RT5 における POSKO の利用期間と使われ方

RT5 では震災の翌日に POSKO が設置された。共同炊事場は、震災の3日後に、集落レベルの婦人会のリーダー(RT5)の発案により設置され、婦人会中心に炊事が行われていた。

POSKO での生活をおくりながら瓦礫の除去や仮設住宅の再建がすすめられた。こうした作業には人手が必要であったが、すべての村人が被災しており、再建順序をめぐる不公平感等から、最初は、共同作業がうまく機能しなかった。

住宅再建を始めるにあたっては、RT 長が再建順序による不公平をなくすために、「すべての再建住宅が完成するまでは村人全員がテント生活をおくり、1件でも完成しなければ全員が再建住宅に引っ越さない」という取り決めを行い、共同作業による住宅の再建が開始され、すべての住宅が完成するまでは村人全員が POSKO での共同生活を続けた。

また、個人に対して大量の支援物資が届けられた際には、支援を RT 内だけで分配するのではなく、Ngibikan 集落の POSKO Utama を介して Ngibikan 集落内の他の RT にも分配された。行政からの支援は基本的には、集落単位で行われ、村→集落→RT という流れであったが、支援の流れは一方だけだけでなく、RT→集落→RT という流れもあった。しかし、隣りあう集落や RT であっても、他集落へ直接提供されたという話は聞くことがなかった。

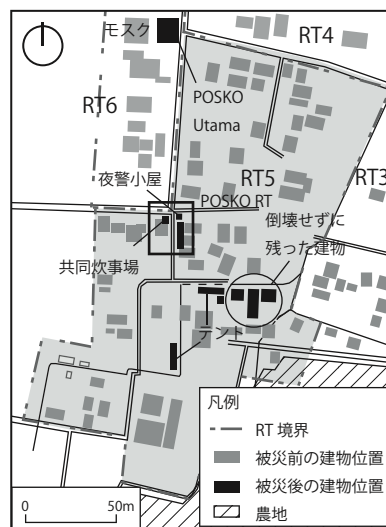


図-6 RT5 と POSKO RT の位置

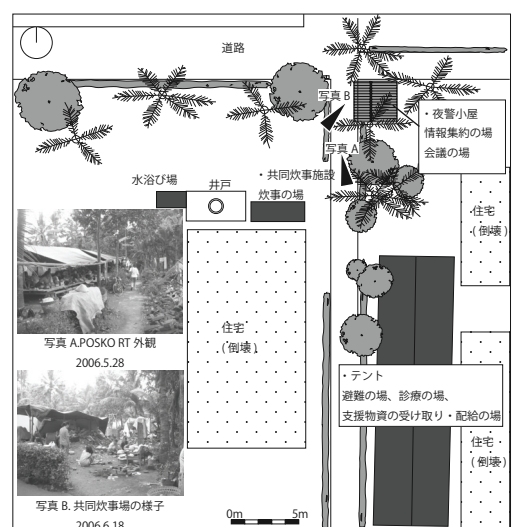


図-7 POSKO RT 配置図

RT5 では、恒久住宅の完成とともに POSKO が閉鎖されることになったが、Ngibikan 集落のドックが RT5 の住民だったこともあり、他の RT では住宅の再建が終わっていないにも関わらず Ngibikan 集落の POSKO Utama と他の集落の POSKO も同時期に主な用途がなくなり、情報集約の場としてのみ引き続き利用された。

5. 本研究から得られた知見と考察

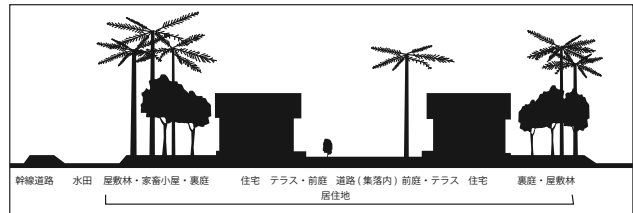
POSKO は、被災直後の混乱した状態下においても、集落環境や立地が考慮された上で、非常に短期間で設置されており、6 種類の用途があったこと、主にテントが利用され、段階的に用途が縮小されていたことが分かった。

運営において、RT を基盤とした集落がベースとなり、地域の代表者によって運営が行われていた。支援は主には集落単位で行われ、村→集落→RT という流れであったが、RT →集落→RT といった流れもあり、同じ集落内の POSKO には連携が見られた。また、RT5 の事例では代表者の住む RT の状況から代表者が判断したことにより、集落のすべての POSKO が閉鎖されており、RT 間の足並みがそろっていない際に、代表者の住む RT の状況のみが判断材料となり、集落内の全ての POSKO に影響していたことがわかった。

短期間のみ仮設として自主的に設置されるものでありながら POSKO があることは、支援格差を防ぎ、地域がまとまることで共同生活を送ることを可能としており、共同作業による現地復興に繋がっていたと考えられる。一方で、POSKO は日常からの集落運営がベースとなっており、物理的に大きな被害を受けても、集落のシステムが残されている場合においては機能しているが、集落単位を越えた避難の際についてはさらなる研究が必要であると考えられる。

【補注】

- (1) 2006年5月27日午前5時53分(現地時間)に発生したM6.3地震で、震源域となったBantul 県を中心に死者5700名以上、負傷者37000名以上、倒壊家屋数は約14万戸という大きな被害をもたらした。
- (2) 運営者を把握するため、まずはCanden 村の担当者に調査目的を説明し、担当者から集落の POSKO はドックと呼ばれる各集落の代表者が運営していたとの説明を受けた。しかし、実際にはKiringan 集落およびCanden 集落において、ドック自身は運営には直接は関わっておらず、ドックの夫やRT 長が実際の運営を行っていたことが明らかになり、2集落では、調査の際に実際の運営者の方に同席していただき聞き取り調査を行った。
- (3) 正式な住所は、Yogyakarta特別州 Bantul 県 Jetis 郡 Canden 村である。(Desa Canden, Kecamatan Jetis, Kabupaten Bantul, Daerah Istimewa Yogyakarta)
- (4) RT(Rukun Tetangga)はインドネシア・ジャワ島における日常生活やコミュニティ活動の基礎単位の1つで、RTの組長は市役所の窓口業務を担い、出生、死亡届、居住証明書を管理する。また、RTではRT内の道路や溝の掃除、夜警、薬剤散布、葬式の手伝い等が行われている。
- (5) 右上図参照。居住地内は全体的に多くの樹木に覆われ多くの日陰があり、比較的快適な環境となっている。



- (6) 聞き取り調査にあたっては、現地ガイドの案内によって対象者を直接訪問(不在の場合は再度訪問)し、実施した。調査は調査シートをもとに通訳を通じて対象者に現地言語(インドネシア語、ジャワ語)で質問し、現地言語による回答を得た。得られた回答は通訳を通じて英語に翻訳され、回答内容を元に通訳を介して追加の質問を適宜行った。調査は、筆者・通訳2名(質問担当、記録担当)・現地ガイドの4名で行った。

【謝辞】

本研究は、京都大学グローバル COE プログラム『アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点』によるものである。本調査にあたって、ご協力いただき、貴重な図面データや写真データを提供して頂いた建築家の Eko Prawoto 氏、調査に快く応じて下さった RT5 のリーダーである Maryono 氏及びCanden 村の住民の方々、調査に協力していただいたUniv. of GadjahMada の工学部建築計画学科/大学院の学生に感謝いたします。

【参考・引用文献】

- 1) 塩崎賢明・西川榮一・出口俊一・兵庫県震災復興研究センター『災害復興ガイド』編集委員会編(2007),『災害復興ガイド 日本と世界の経験に学ぶ』, pp112-137, クリエイツかもがわ。
- 2) International Recovery Platform(2010), IRP Recovery Status Report 01 Yogyakarta : Yogyakarta and Central Java Earthquake 2006
- 3) 澤田雅浩(2010),「新潟県旧山古志村の現在から」, 日本建築学会農村計画委員会, 安心して住み継げる故郷(くに)づくり-自然災害、大規模事業、地域衰退にどう取り組むか-, pp11-14.
- 4) 山崎義人・田中貴宏・山口秀文[他](2009), 伝統的な建物配置や敷地構成の居住環境の再建への影響--2006年ジャワ島中部地震被災地であるプレンプタン集落を事例として, 日本建築学会計画系論文集, 639号, pp1075-1083.
- 5) 檜府龍雄・迫田恵子・亀村幸泰・白川和司・今井弘・松崎志津子(2008), 開発途上国の災害復興事業における住宅の安全性向上の可能性に関する研究-2006年ジャワ島中部地震のケース・スタディー-, 地域安全学会論文集 No. 10, pp457-464.
- 6) 山本博之(2010), 人道支援活動とコミュニティの形成, 林勲男編著,『みんなく実践人類学シリーズ9 自然災害と復興支援』, pp362-382, 明石書店。
- 7) 山口秀文・山崎義人・田中貴弘・重松力・横道沙織・藤原圭祐・北後明彦(2008), 2006年ジャワ島中部地震における集落復興過程に関する研究 その4 -共同空間と公共施設のあり方からみた集落環境-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp543-544.
- 8) 紅谷昇平、福留邦洋：新潟県中越沖地震における柏崎市コミュニティによる避難所運営の取組、地域安全学会梗概集(23), PP. 21-24, 2008. 11.
- 9) 坪川博彰、長坂俊成、白田裕一郎：災害リスクシナリオを用いて避難所運営を理解する試み：災害リスクガバナンス構造の再編を目指したリスクコミュニケーションに関する研究、地域安全学会論文集 No. 10, PP511-519, 2008. 11.